

## 令和3年度前期始業式校長講話

### 大切なものは目に見えない

長野県蘇南高等学校長 小川幸司

#### 1 はじめに

今日から令和3年度の蘇南高校が始まりました。

3月末の終業式から今日までの短い間に、いくつかの工夫をしました。まず、校用技師さんが1・2年生のホームルーム教室の壁をきれいに塗り直してくれました。卒業生が3年生の教室をきれいに塗り直したので、1・2年生の教室も同じような環境で学んでほしかったからです。また、ホームページをまったく新しくしました。壊れかけた掲示板のようだったホームページが、ハイセンスな見やすいホームページになりました。是非、見てほしいと思います。

校舎のあちこちに放置されていた粗大ゴミの多くを撤去しました。前庭に放置されていた枯れた松の伐採木を撤去しました。なるべく校舎をきれいにしたかったからです。みんなが学ぶ学校をみんなできれいに使ってほしいと思っています。

#### 2 大切なことは目に見えない

サン＝テグジュペリというフランスの作家がいます。飛行機の操縦士でもあった人で、第二次世界大戦のさなか、ナチスドイツと戦うために偵察飛行をしている最中に行方不明になりました。約半世紀が経ってから、フランスのマルセイユの沖合で彼のものと思われるブレスレットが見つかり、それから約十年後に海底に沈んでいる彼の飛行機の残骸が発見されました。しかし、いまだに遺体は見つかっていません。

彼の代表作が、童話『星の王子さま』（原題は『小さな王子』）です。

操縦士の「ぼく」は、サハラ砂漠に不時着して危機的な状況に陥っているとき、B612という惑星からやってきた王子と出会います。惑星 B612 は、家くらいの大きさしかなく、3つの火山があります。王子は、毎日、火山の煤を払って爆発しないように手入れをしたり、巨大に成長するバオバブの木の種を取り除いたりする作業を日々していました。惑星 B612 には、1輪のきれいなとげのついた花がありました。王子はこの花をととても大切に守っていたのですが、強がりばかり言う花とけんかして、他の星に旅に出て、やがて地球にやって来たのでした。

王子は地球で、数千本のバラを見て、自分が愛していた花は「あたり前のバラ」だったのだと気づき、それがひどくちっぽけなものだったと気づいて、泣きます。

泣いている王子のもとにキツネが現れます。王子はキツネと仲良くなり、キツネは、もう一度地球上のたくさんのバラを見てごらんと王子に言います。王子は、言われたとおりにバラの花々を見つめました。そのとき気づいたのです。これらのバラと違って、ふるさと B612 のあのバラは、自分にとって命をかけてもいいくらい大切な「一輪の花」なのだということに。

キツネは王子に言います。「心で見なくちゃ、ものごとはよく見えない。かんじんなことは、目に見えないんだよ。」

\*\*\*\*\*

この「大切なことは目に見えない」、だから「心で見ると」という言葉は、この童話の最も有名な言葉になっています。

### 3 心で見ようとする

では、心で見るとは、どういうことだと思えますか。

ひとつは、世界に向かって「なぜ？」と問いかけることだと思えます。自分から一歩掘り下げて知ろうとすることです。そのときに大切なことが見えてきます。

たとえば、先ほど紹介した、学校の整備について関係して、「なぜ私は蘇南高校の生徒でいられるのだろうか」という問いを持ったとします。蘇南高校が皆さんの学ぶ場として存在するためには膨大なお金が必要です。たとえば、電気とかトイレが成り立つためには、電気代・下水道代だけではありません。大きな施設は、電気設備の点検とか浄化槽の点検が法律で義務付けられています。それぞれの点検には業者が入り、年間で数十万円の料金が発生します。その業者は入札で決められ、仕事を決められたとおりに行った仕事の点検も行われます。外の業者がひとつの仕事をするためには、事務室の職員が膨大な書類を書きます。

蘇南高校が長野県教育委員会から一年間にもらう予算は、約 4000 万円です。そして 32 人の職員の給料が必要です。全国の教員の平均給与を人数にかけると、人件費が約 2 億円必要です。さきほどの予算と人件費を合わせると、2 億 4000 万円です。これを蘇南高校の全校生徒の人数 152 人で割ると、皆さん一人一人が一年間蘇南高校の生徒でいるためにかかっている費用（教科書代や修学旅行代、部活動費用は別）がわかります。その額は、何と一人当たり 160 万円です。皆さん一人のために、ひと月 15 万円必要で、それを皆さんの保護者や世の中の大人たちが税金で納めてくれているのです。ちなみに私が一年間に支払う税金は 80 万円くらいですから、一人の高校生活のためには、2 人の校長の払う税金が必要だということになります。もちろん校長は人数的にそれほど多くないので、何人もの方の税金で自分の高校生活が成り立っていると思っていけないのでしょうか。皆さんは、大勢の人によって支えられて生きているのです。この大切なことが、今まで見えていなかったのではないのでしょうか。

いつか未来に皆さんが働いて税金を納めた時、それが誰かの高校生活を支えることになるでしょう。では病気などで働けなくて、ずっと支えられる立場だったらどうなのでしょう。おそらく、そうであったとしても「ありがとう」と周囲に伝えることで、人に元気を与え、お金とは違う形で人を支えることになるでしょう。

私は大勢の方々に支えられてこの蘇南高校が成り立っていることが見えてきたとき、あらためて一日一日を大切にしたいと思いました。

心で見ようとすることの二つ目です。王子は、B612 の花を愛していたのに、地球に来て「ただのバラ」だとわかりがっかりしていました。でもキツネに言われてもう一度考え直したとき、それはかけがえのない「大切な花」だということに気づきました。つまり、目の前の人・いのちをかけがえのないものと思うこと、それが心で見るということです。

終業式の時、私は皆さんに、世の中には「大きな物語」が氾濫しているから、「小さな物語」を大切にしようと言いました。目の前のいのちをかけがえのないものだと思うとき、「小さな物語」が生まれます。東日本大震災の時にお父さんを失った青年が、今でもずっと「お父さん、目玉焼き、ありがとう」と言いたかったと悲しんでいるというを紹介しました。お父さんのいのち、お父さんの目玉焼きは、かけがえのないものなのです。

『星の王子さま』に戻ると、いよいよ「ぼく」が王子と別れる時が来ます。王子はB612に帰るからです。王子は「ぼく」にこう言います。

「夜になったら星をながめてごらん。僕の星はとても小さいから、君は見つけることができないだろう。でもそのほうがいい。君がたくさんの星のどれかが僕の星だと思って眺めていると、君はどの星も眺めるのが好きになるよ。星がみんな、君の友達になるんだ。」

\*\*\*\*\*

たくさんの星のどれかをかけがえのないものだと思うと、すべての星がかけがえのないものに見えてくる。「心で見ようとする」ことを始めると、いろんなことが「心で見えてくる」。

それが、人間の幸せだと、サン=テグジュペリは言いたかったのだと思います。

おわりに

大切なことは目には見えない。

だから心で見ようとする。それは「なぜ？」と問いかけることであり、目の前のいのちをかけがえのないものと思うことだ。

そのとき、色んなことが見えてくるようになり、友達が増える。

3年生、そして2年生としての皆さんの一年間が、「心で世界を見る」日々になることを期待しています。

校長室は、皆さんが話に来ることに「ウェルカム」ですからね。

(参考文献)

サン=テグジュペリ、内藤 濯訳『星の王子さま』(岩波書店、1962年)

\*様々な翻訳がありますが、私はこの内藤訳が一番好きです。ただし、講話のなかの引用文は高校生的心里に届くような文体に改変してあります。